



T1A1
10
(TA84)

小學讀本卷之二

第一

此女兒ハ人形を持て
り○汝も人形を好む
う○我も甚こきを好
めり○此男兒も人形
を持てりや○否男兒
ハ人形を持たばし



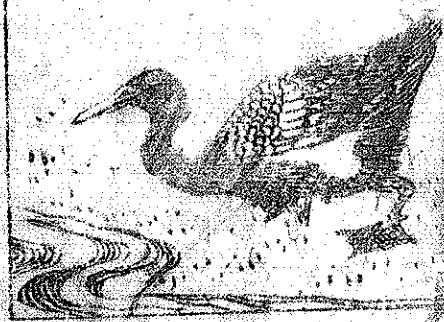
田中義廉 編輯
那珂通高 訂正

鞭を持てり、男児の遊ハ、女児と異なきなり
老たる牝雞、鶩の子と多く伴へり○此鶩の子ハ、



皆水の中ハ飛入きり○此鳥ハ、
其性水上ハ泳ぐことを好めり
○牝雞ハ其沈み溺きんことを
恐きて甚憂ひ悲めり○然きど
も鶩の子ハ牝雞の心を量り知
らばして隨意ハ游べり○牝雞
ハ何を憂ひ悲むと思ふや○牝
雞ハ此鶩の游水鳥なるを知ら

ばして我子と思ひ悲めるなり
爰ハ成長したる鶩あり○鶩の
嘴ハ牝雞の嘴より大ふして其
足ハ蹠あり故ハ水ハ入りて能
く泳ぐことを得るなり



此ハ何家あると知きりや○これを學校あるへ
ハ數多の男女の子此家ハ通ふを以て知らきた
り○汝ハ小兒の遊歩場ハ出て遊ぶを見たり
や○數多の小兒出でて走るもあり球を弄ぶも
あり或ハ紙鳶を揚げ或ハ輪を廻して遊べり

○男兜も女兜も學校
 へて、能く勉強さべ
 ー。能く勉強したる、
 後は非きば遊歩をも
 するさるとも誠、樂ま
 ことハあきものあり
 今此子の釣りたる魚
 ハ鯉あり。汝も魚を
 釣り得たるときハ能く心を用ゐ、釣糸を切ら
 ることあるべー。天曇りて雨少しく降り来



きり。○魚を釣るハ雨天の
 ときを宜しとある。○然り
 少しく雨降りて風あく、暖あ
 る日を宜しとハ。○汝ハ魚を
 釣るを以て宜しき事と思ふ
 々。○然り魚を釣して食する
 ハ、悪しき事。あらばと雖、釣
 りたる魚を弄びて徒に捨つ

るハ宜しうべ
 男兜と女兜とあり。○これハ學校へ行く途中

り○今急ぎて、學校へ行かん
と思ふがゆゑは、男児ハ、女児
を助けて走りり○此児等ハ、
學校へ行くと樂と思へりや
○然リ、此児等ハ、其性善きも
のをきバ、學校へ行きて、學問
することと第一の樂と思ふなり



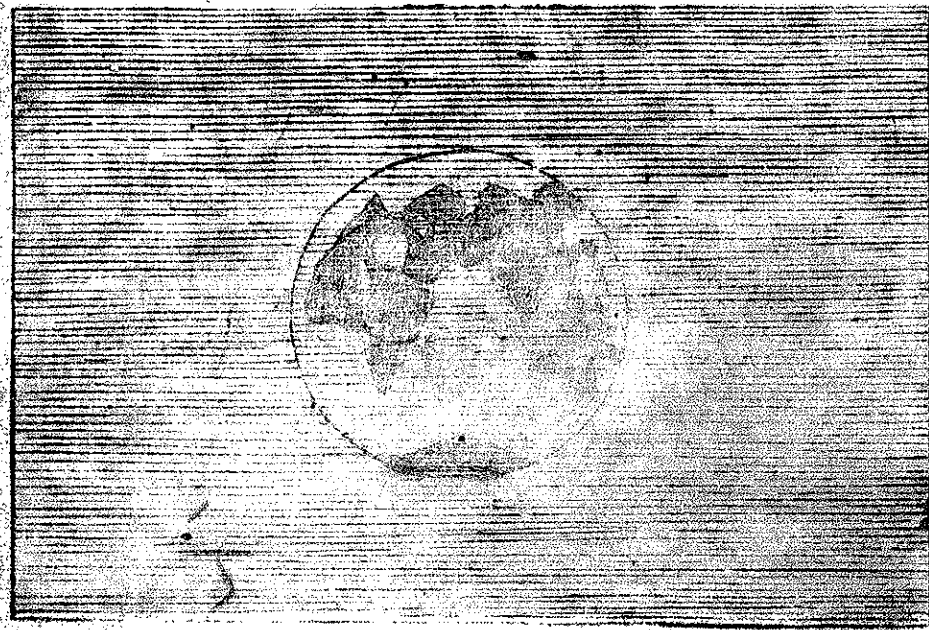
此馬ハ、柔和ある馬ゆゑ、二人の小児を乗せて歩
めり○此馬を走ると思ふ○此馬の前の一足
を擧げて、あとの一足を下さんとするを見きバ



走るハ、いかに徐々歩
むなり○前の小児ハ、手
綱を両手は持ちたきと
も、其見ゆるハ、只右の手
のこあり○後の小児ハ、
馬より、落つることを恐
るゝゆゑハ、前の小児を
抱きてをきり

此處ハ、工人の作事場あり○數多の大人ハ、作事
を事とせり○二人の小児ハ、此作事場より、板

さるものよて、世界は光と
熱とを與ふるものあり
○我等晝は太陽を見ま
ども、夜は見ることを
○汝夜の太陽を見るこ
とを得ざるは、何ゆゑか
るぞ知きりや○夜は太
陽の方に向をざるゆゑ
に見ることを得ざるか
り○月も亦圓きものか



きども、太陽及地球の如くは大あり○月も原
より光あるものをきども、太陽の光を受けて、始
めて輝くものあり

我等一同は草刈場に出
来きり○小兒は刈りた
る草の上ふ坐し居て、草
を刈るを觀る○枯草は
柔なる物をきば此上は
遊び戯るゝふ宜きか
り○草は牛馬の食あり

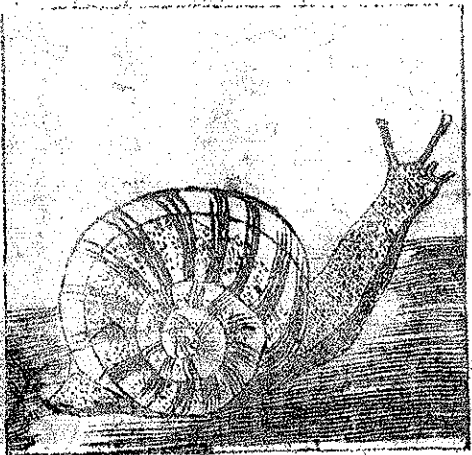


ゆゑは牛馬を畜ふ家にては夏の間に刈りてこ
きを貯ふ



狐は犬に似たる獸にして
頭平く鼻と耳とに大りて
尾は甚長し。此獸は穴の
中にお住し、晝は隠れて出で
ば夜は入き、穴より出で
て田畠の傍を遊行に。狐
は食を貪る獸にして多く
雞の雛を食ひ又好みて桑

の實櫻の實等を食ふ。雞を捕るに穴を持ち
行きてこきを食ふ。もと犬を見るときは穴の
中へ逃げ入るて出づることあり。是は穴へ入り
ざれば直ぐ犬は噛み殺さるるの故あり。
蝸牛といふ蟲は足がきぬゑは歩むこと能はば



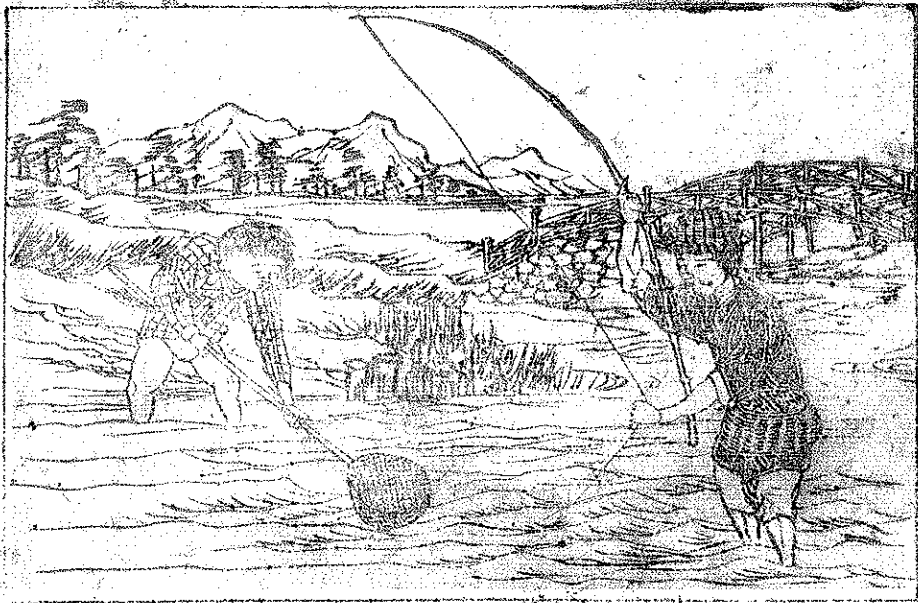
只匍匐するのみあり
この蟲は背の上へ殻あり、物
は恐るゝとき、其中へ縮み入
る。蝸牛の動くときは四本の
角を出だに、其中二本の長き角

の先は目あり、短き角の下ふ口あり。○此處は冬
 土の中は伏し、春の至るを待ちて出づるあり
 汝も、此處は男兒と女兒
 と驢馬の在るを見たり
 や○男兒は驢馬を乗ら
 んどけ○何如も汝を乗
 り易かるべしと思ふ
 ○驢馬は小さき馬なれ
 ども小兒は乗り難う
 なるべし○遙の向ひは荷車あり○汝は此荷車と



何ありと思ふや○遠き處ゆゑ慥み見分くるこ
 と能わざれども、畠の小路は、あるを見ずば穀物
 を載せたる車あるべし
 此圖に画きたるもの何ありや○大人と小兒
 と二人水中は立てり○此等は何をなすや○此
 人々の魚を漁するあり、大人の釣りたる魚は大
 あるゆゑは強く曳く糸の切きんことを恐る
 て遠く曳き舉げざるあり○男兒の特ちたるも
 のも何ありと思ふや○そきハ網の類もてたま
 といふものあり○男兒は此網を以て魚を捕へ

んどい○大人の脇懸
 けたるゝ何あるぞ○こ
 きい蓋の何る籠もて其
 中ゝ魚を入るゝなり○
 此人の立ちたる處ハ深
 ーと思ふ○人の膝ま
 で水は入らざるを見き
 ば甚深うゝべもー深水
 をきゝ二人とも立つこ
 と能をさるべー○此河



架したる橋あり、汝ハ此橋ハ何みて造りたる
 と思ふぞ○橋はハ木と石と鐵との別ハ何きど
 も、一事ハ木にて造りたる橋なり

汝ハ此男兜を何歳許あ
 りと思ふや○此男兜ハ
 十歳以上なり○此男兜
 ハ善人ありと思ふゝ
 ○不學問をもせば又遊
 歩をもあさびゝて休み
 をるゆゑに怠りものと



知らるゝあり○此男児ハ何も寄りて何を見る
や○此男児の寄りたるものハ大なる石の柱な
り又此男児ハ何をも見に只天をかかむるあり
○總て小児ハハ、勉むる時もあり遊ぶべきとき
もあり○此小児の如く常ハ勉強とあそびると
まハ成長の後人ハ勝ることと得ざるあり
又ハ又怠惰の小児あり○彼ハ學校へ行くと云
ひしハ何ゆゑハ學校へハ行くべしと途中ハ遊
び居るや○未學校へ行くべき時刻来らばや○
學校までハ既ハ誓古始まりたきハ此小児もど

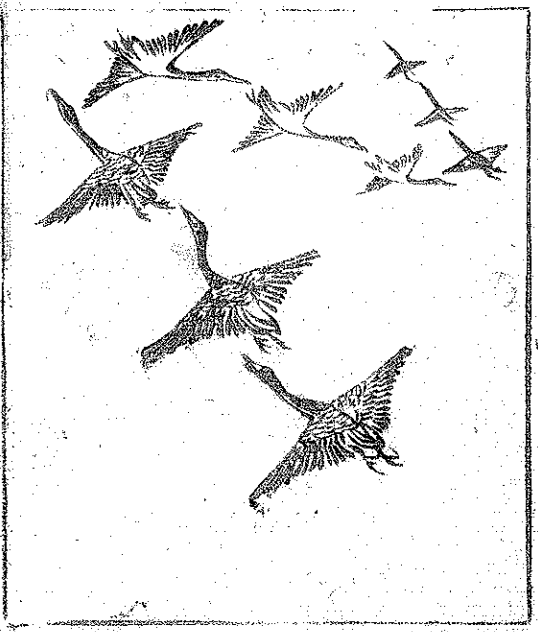
く行くべき時刻あり○然らハ何ゆゑ爰ハ止ま
り居るや○彼ハ犬ヲ乘り又他の怠りものと遊
むんと思へばあり○彼ハ
學校へ行くものありハ其
書をハ何處ハ置きたるや
○書をハ自分の家ハ怠き
なるあり○さきハ學校へ
行きたりとも誓古あるこ
とと得ば○善き小児ハ書
を大切ハありて學校へ行



くを好み、誓古の時間来きへ決して途中まで遊
び居ることなく、學校までも能く勉強して學ぶ
ゆゑ、其等級屢進むあり

第三

雁の列をあけて行く圖
あり○見るべし一羽の
雁導をふせば、其他の雁
へこそきゝ隨ひて飛行く
と○是を、何處も行くや
○或は水邊は行き、草



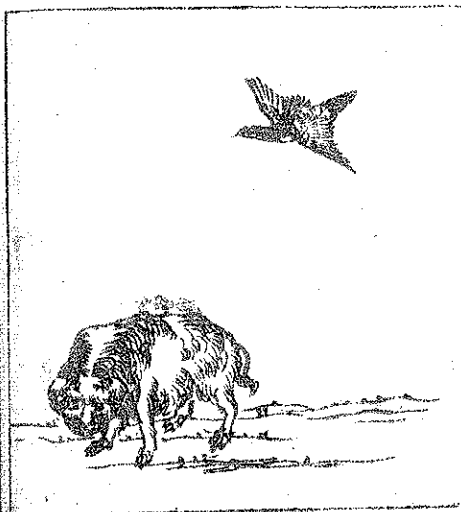
の間は息み、或は田より下りて食物を求めんとし
るあり

此鳥は冬は北より南に來り、春は至きへ又南よ
り北に歸る故は、夏は此地に居ることあり



地は生ひ出づる物み草と
木とありて、木は灌木と喬
木とあり○草は其幹葉一
年限り少く枯るものな
り、灌木は高一丈は出で
と雖、其幹は枯きざるもの

あり○喬木とハ成長して高大に至るものを云ふ○此三の者と合せて植物と云ふ植物ハ生を保ちて能く成長し又死してハ枯朽るものなきとも人の如くハ物を思ひ根ハ食物を地下より吸ひ葉ハ能く呼吸せれども鳥獸の如く動くことあり



鳥ハ二つの足と二つの翼ありて多くハ空中に翔る又水上に住むものもあり○獸類ハ四足ありて膚ハ長き毛あり

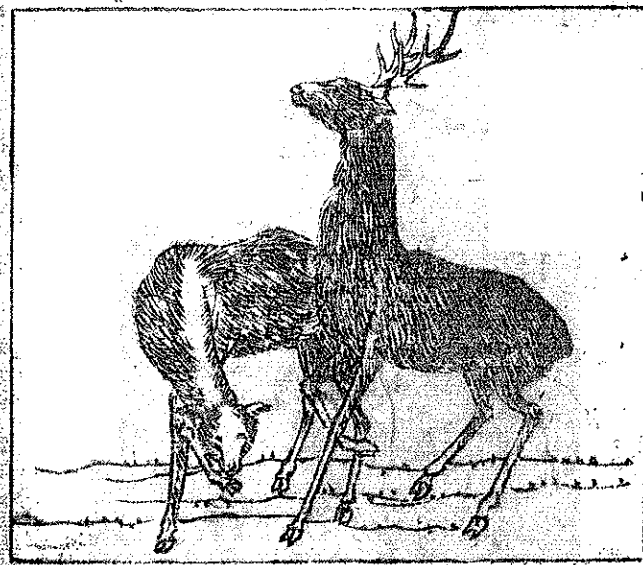
り○此鳥と獸とハ身體を意に従ひて動うせども人の如く言ふこと能はず汝ハ實の草木の種類を知きりや○其莢を見て、豌豆と蠶豆とを知り穂の形を見て、稻と麥とを知るべし

草木ハ皆種子あり、豌豆蠶豆ハ莢の中は在りて梨李、橙ハ肉の中は在り○種子の食物とあるものハ稻、麥、豆、黍粟の類なり、肉の食



物とあるものハ梅桃李蜜柑の類なり

草木ハ皆種子より生じ濕ひたる土の中ハ種子を置くときハ漸々膨脹して遂に破裂し其所より芽と根とを生じざるあり
鹿ハ山林に住する獸あり
この獸の牡ハ枝を生じたる角あり牝ハ角を其色ハ茶褐色にして白ま斑あり
鹿ハ長き足ありて走ると



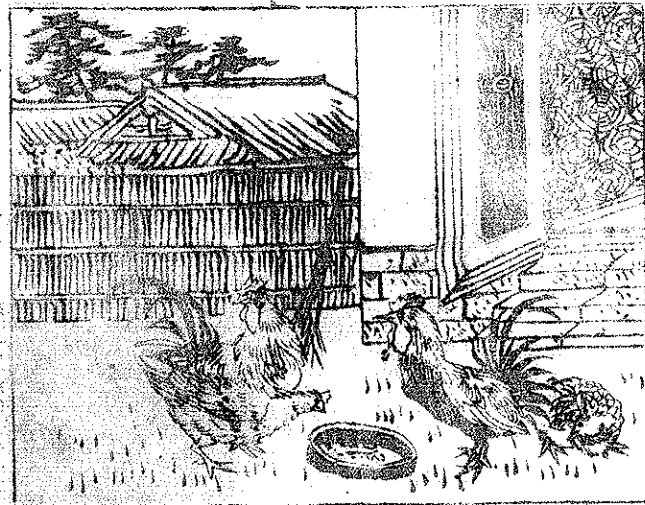
と甚速あり○常ハ草木の葉を食とし或ハ田野に來りて穀物を食することあり此獸の角ハ堅くして器に造るべく又其皮ハ席とさばべし
此男兎ハ惡しき心のものあり汝ハこの男兎の持てる帽の中にある物を見たるか○これハ柿の實あり○此柿の實を垣と踏えて隣家より盗み取るあり○今此男兎柿の實を盗み取り垣を踏えて出でんとある所を數多の犬ともこれを見て男兎を追ひかけ一匹の犬男兎の裾を咬みたりよりて男兎ハ垣を踏え去ることを得ば

此時盗みたる材の實を捨てあへ犬は裾を放つべきども此男兜へこれを捨つること能はば○他人の物を盗むは決して為まじ



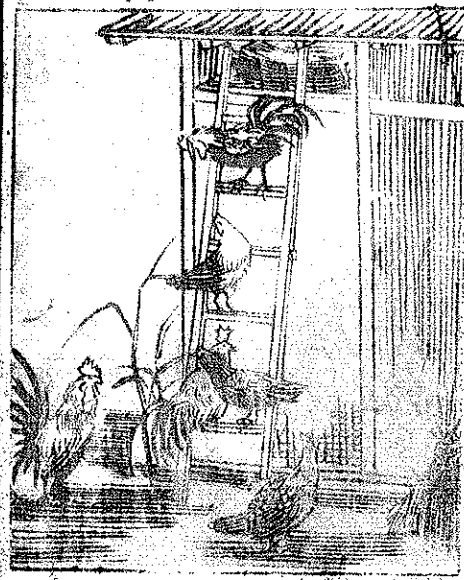
きことなり善き小兜へ自分の物おぼらされず取ることあり○常は行状の正しきものへ幸多く正しからざるものへ幸を得ること能はばきく汝等他人のものと見て何如あるものありとも必これを得んことを欲あることあらず

爰は四箇の雞と穀倉とあり○汝が見る所にてこれのありや○否家の後ふ松あり垣は寄せて立てたる筈あり雞の飲水を入れたる鉢



あり○汝へ此鉢は水ありと思ふや○必水あるあるべし○何を以て水のありと知るや此鉢を少し傾きて一邊の縁高く出でたるを以て水のありと知り水の傾きたる鉢の中までも決して斜

傾くことなく其表面は必一様な平なるものなり。○汝は雞の水を飲むと見しや、雞は牛馬の如く首を下げて飲むこと能ふべからず。一滴口へきば首を擧げて咽ふ飲み下だせあり。此處は何如ある所ありや。○此處は穀倉の傍なるべし、雞は巢に上らんとして梯子を傳ひ行くあり。○梯子に横木ありしき何ありや此横木の梯子の級あり、



汝は雞の巢を見たるか。○巢は隠れて檐の裏にあるゆゑ見ることを得べし。

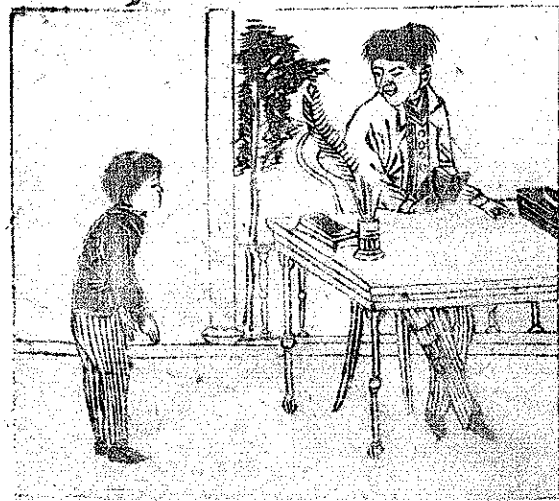
汝此處より来き汝昨日失ひたる所の書籍を尋ね得たりや。○否、未だ尋ね得べし。○汝は文庫の中を捜し見ばや。○幾度も捜し見たきども、其處よりなし。○汝今一度尋ね見よ、書籍あけきば學ぶこと能ふべし。

又汝は筆ありや。○筆は命せらるる如く、文庫の上より置きたり。○汝は筆の用ゐるたを知きや。○否、未だ用ゐるたを知らば。○汝今其筆を取来

き、汝も筆の用ゐ方を教ふべし、筆の用ゐかたと
知らざれば字を習ふこと能はば
汝へ、今日、學校へ行きたりや
○學校へ行きて、終日學びて先
刻歸り来きり○然らば座は
就きて、復讀せよ、凡て學びた
る所を、常は復讀して決
て忘るべからば

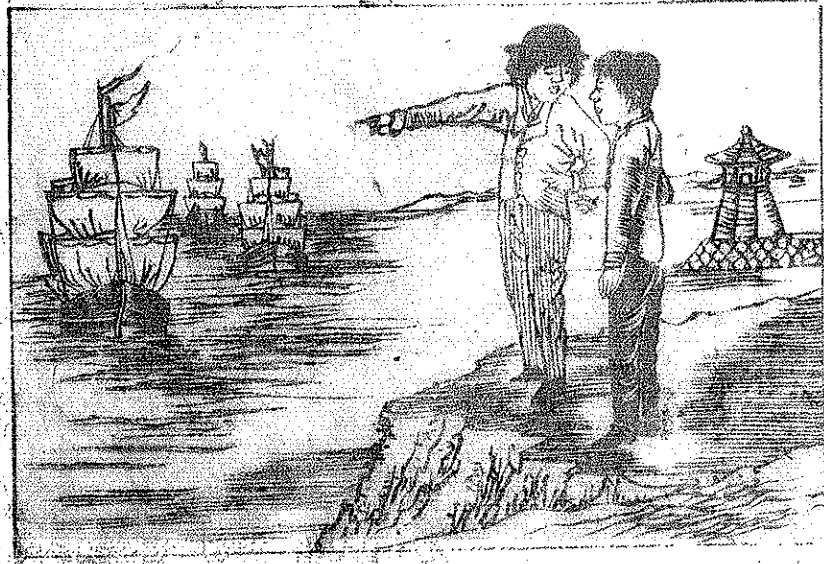
第四

岸の上は、二人の少年ありて三艘の船の岸より



くと見居きり○三艘共、帆を十分は張りて櫓
の上は、旗を揚げたる船な
り

一人の少年云ふ我う朋友
は去年先の船を乗りて外
國へ往きたりし日、日を數
ふき、其出立せし日より
今日まで、殆一年は及びて
歸り来きり
彼の両親も日々彼の歸る



を待てり。○今日無事なる顔を見ることが得て
何許か喜ぶか。んまた彼男も父母の恙なき
顔を見れば定めて大に喜ぶべし

彼船は堅固なる船にて風雨は逢ふとも破損お
く無難に歸り来き。船中の人々皆此船を忝
く思ふあるべし

人々の外國に行くは學問或は貿易を志して我
國の利益をおさることと欲するがゆゑあり
總て鳥を嘴の長きものと短きものとあり。此
嘴にて食物を啄む。鳥は穀物を食するもの



と魚又ハ蟲を食するものと
あり。○鳥の目ハ面の兩側は
ありゆゑ一時は兩方を見る
ことを得るあり。○林中は遊
ぶ鳥と林禽といひ水上は遊
ぶ鳥と水禽といふ。○鳥の足
は四指ありて三指は前一
指は後ふあり然きども啄木鳥類も前後各二指
ありて能く大木は上下樹皮の中は住む蟲を
捜し食ふ

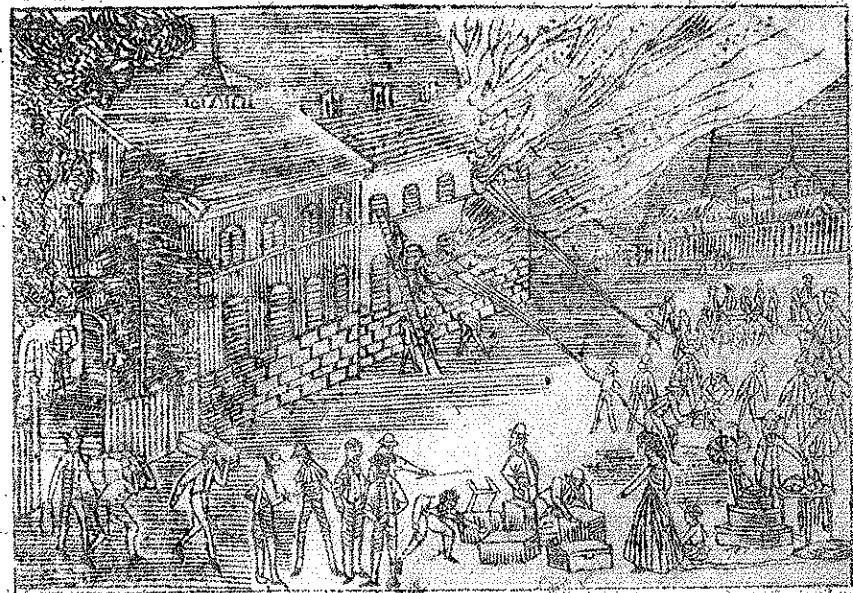
此人の驚きたる風情あり是は何故ありや○何故あることぞ知らば○此人を久しき以前より遠方より行きて今我郷に歸り来るるに昔住みたる家の變りたるを見て驚けるあり、

さて此家の斯く變りたる所以と話し聞ふにべし、

此人の家を出でたる後近隣に一人の小兒あり



が此小兒に至りて惡しきものにてある日戯紙を焼きて遊べる其火忽家の障子に燃えつき終に此家まで焼け失せたり○さきば今此人我家に歸り来りても未妻子の行きたる所をも知ること能はぬゆゑに悲み歎くあり
今此人の家の焼けたる時の状を圖して示さん
○火と烟との家の窓より吹出づる所を見よ○又家は懸けたる梯子あり○梯子より上りて火を消さんとある人あり○多くの人の叫筒を注ぐ水を注げり、



此圖は画きたるを、桑田ある牛よりして此小兒は

然きども火猶消をばして
家終も焼け落ちたるゆゑ
その家の人々も皆逃げ去
きあるあり
さきば小兒は火を弄ぶへ
うへで一度過つ時家さ
も倉をも失ひ甚しきは至
りては其身をも失ふこと
あるものあり



随ひ徐る歩めり此小兒は今牧場も牛を曳き行
く所あり。○此小兒は何ゆゑも歩みながら書を
讀むや此小兒は其性極めて賢く常に學問ある

ことと好めども家貧しき
ゆゑは學校に入ること能
まばりて日々牧場を行く
あり然きども學問の志深
まふ因りて道を行く間も
書を讀むあり又牧場も至
りても休む間も書を見が

ることあり。○此の如き小兎ハ他日必人よまされりて、貴き人とあるべし。惡しき小兎ハ日々、學校へ行くと雖、能く勉強せしめて遊ぶことのしを好むゆゑ、後ハ愚ある者とありて、貧賤ハ其身を終るべし。

雲雀巢と麥畠の間、造りて、雛を育てたり。○麥ハ已ニ熟して刈るべき時は至りたるハ、雛ハ未自由ニ飛ぶこと能はば、一日、親鳥食を求めんとて、飛び去り暮る及びて、歸り來さば、雛告げて今日、此畠主なる農夫其子と共に來りて、明日ハ近

隣の人を雇ひて、此麥を刈り取らんとて、歸せりと云ふ親鳥聞きて、彼近隣の人を雇はんとあらば、未急ハ刈取るべからば、明日ハ此處はありとも恐るゝ足らばといひ、其翌日も亦食を求めんとて飛び去りたり。

かくて日の暮るゝ比、親鳥歸り來さば、雛又告げて、今日も農夫其子と共に來りて、近隣の人も同



く、已う作りたる麥を刈るに暇あらさきべ明日
ハ、朋友親族を頼みて刈り取らんとて歸きりと
云ふ、親鳥ハ、彼尚他人を頼むの心あらは明日も
憂ふるは足らばと云へり、

さて其翌日親鳥例の如く飛去りて歸り来るも、
雛の云ふ今日ハ農夫父子来りてかく麥の熟せ
るうへハ、最早他人の力を待つは暇あらば明日
ハ、自刈り取るべいとて歸きりと云へり、

親鳥ハこゝきを聞きて然らば我等も疾く此處を
立ち去るべし農夫が自刈り取らんと決りたる
うへハ、必日を延ばすべからばといへりとぞ、
親鳥の言實は理あり、他人は依りて事を成さん
とある者ハ、恐るゝも足らざれども、自為さんと
決まる時ハ、須臾も猶豫せざるべけきばかりさ
まば人々皆自為さんことを志して、他人の力を
頼むべしと云へり、

第五

今花園は、善き種子を蒔きて、善き植物を生ぜし
め、美しい花を開くべしとあるは、園中は、蔓草
る雑草と、抜き取らさるゝとあるは、蒔きたる種子を

害して生長すること能わざるも

今此處は花園の雑草を抜き去る園を出だして
以てこれを示さん

地へもとよきものなきと
も、善き種子を蒔くされば
よき植物を生じ、美しき花
を開くこと能はば、又芽既
ふ萌出でたるときは能く
培養せざれば生長ゆるこ
と能はば、雑草へときよ反



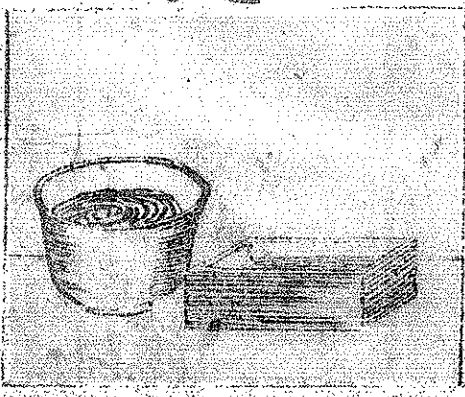
して種子を蒔くときども、自生長しときを抜き
去らずきば、大に蔓りて、善き植物を害し、終にこ
きを枯らし盡はるに至るべし

人の心へもと善きものなきども、善き教を聞き
て、これに従ふされば、善き人と成り難し。教の
教へ、即我心は、種子を蒔くは、同し。故に心を正し
てこれを育ひ、能く成長せしむべし。然きども、正
の心の生し易きこと、雑草の如くなきは、心正
蒔きたる善き種子を害せざるものなり。初めこ
きを抜き去らば、はるるべくも、こきも、こきも

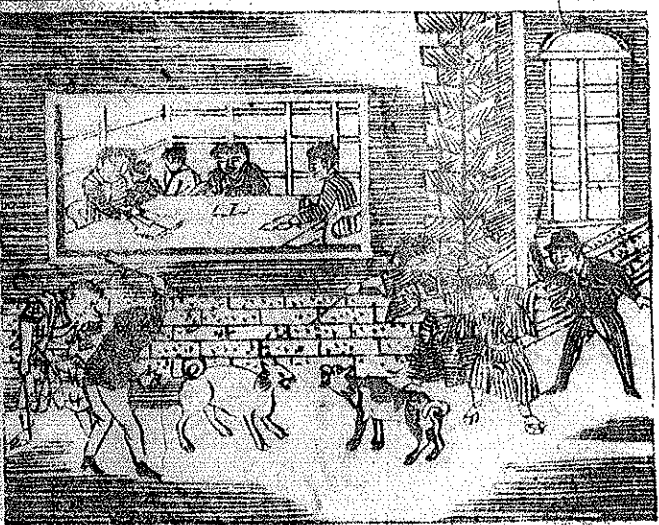
ま去ることを怠りて成長せしむるときは終る
の中は萌せる良心を害してこそを枯らし盡し
るに至るべし

汝等善き人とあらんことを欲せば此人の雜草
を抜き去るが如く勉めて不正の心を抜き去る
べし

爰は圓き器と四角ある器とを人
きたる水取りもと水は同くけを
ども其器の形は由りて或圓く或
四角ある形となせり



人も小兒の時ハ此水の如く善き友と交りて善
きことを見聞けば善き人とかり又惡しき友と
交りて惡しきことの見聞けば惡しき人と
あるあり



家の内外は數多の小兒あり
て其遊ぶべきの各異あるを
見るべし家の内ある小兒ハ
日々學校にて學びたる所を
家は歸りて其友と互に問を
してこそを樂とし此等ハ他

日、必賢き人となるべし又外は集まり遊べる小
兒ハ學校より行つざる者と見え犬を噛み合
せ棒を打揮り無益の遊のこととせし此等ハ後
日必愚なるものとなるべし汝等賢き人となら
んと思ふ能く心を用ゐて常は善き友と交り
必惡しき小兒等と遊ぶべからず

汝等事の正しきとざるを知るべきたとひ他
日利あることと思ふとも決して行ふべからず
又惡しき業を假にも心は行ふことを思ふ
べからず若し心は行ふことと思ふときハ縱令

事に出さばとも既に行ひたるは同一と知る
べし

凡て惡事ハ虚言より始まるものありさきの暫
其身に利益ありとも決して虚言はべからず虚
言を以て得たる利益ハ他人の物を盗みたるに
同じく終はば其身の害となるべし

むかし一人の男兒ありて毎は狼來きり狼來き
り誰か出で救ひ給へど大は呼びて途を走き
りこそ其ハ真に狼の來るはあらば他人の出
來りて救ふんとあるときは欺き得たりとて大

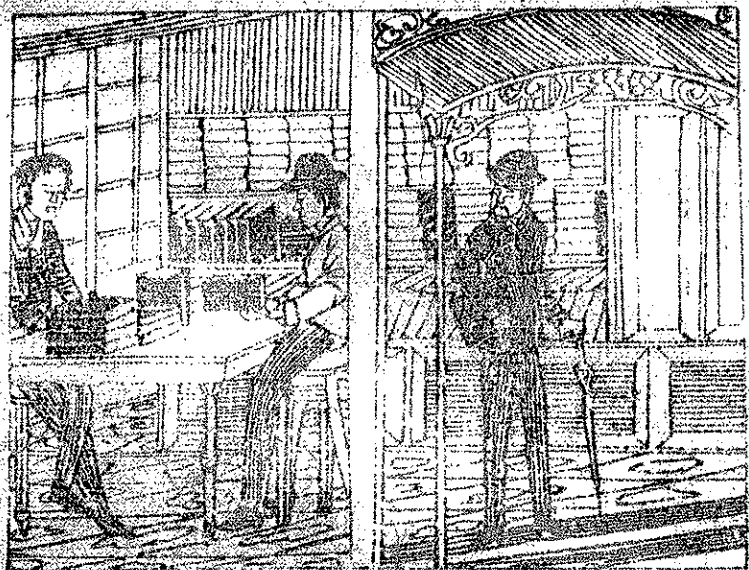
は其人を笑ふを以て戯とせるあり

斯くあること、度々あり、ある日眞は狼来りて、此男兜を食ふんとて、男兜へ大に呼びて狼来きり、救ひ給へといへども誰も亦例の虚言あるべしとて、こきを救ふものあり、ゆゑ終に狼のため、噬み殺されたり、故に平生戯るも虚言



を以て人を欺くもの、適眞實のことを話さずとも信とあるもの、あらざれば、常に慎むべきことあり、ばや

此處を何如ある家ありと思ふぞ、〇こそ、書肆あり、爰に三人の男あり、帽を戴きたる二人の者の、書籍を買ふんがため、此處に来りたるなり、一人は、既に一冊の書を、購ひ得て去らんと



一人を机上の書の價を定め居るあり
今此二人の書籍を買ふ何の爲ありや家も歸
りて、こきと理會し已の智識を増さんとされば
あり、書なけむば、智識を増しこと能ふば、智識無
きときは、國の利益を興へこと能ふば、故に志あ
る者ハ有用の書とバ、金を惜まばりて、こきを購
ふあり

此圖の男ハ手ヲ持てる書を読んで、其義を小兒
に語り聞らしむる所あり○汝との小兒ハ能く
心を用ゐて、其話を聞くと思ふ○此小兒ハ心



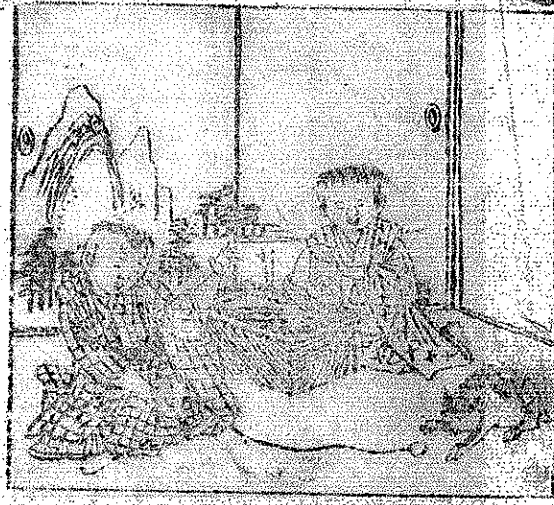
を用ゐて、其話を聞くと見え
て、此男の語ることを深く考
ふるさもあり、思ふも今聞く
所ハ、此書の中の尤大切な
箇條あるべし○凡て教を
受る者ハ決して倦怠の
を生じべからば、倦怠の心
生ずるときは、直に其顔色は見え、ゆゑに考
ふる者も亦こきを知りて、懇に教訓にすること
しされば、教を受ける者の皆此小兒の如く心を用

めて其話を能く考ふべきことなり

第六

汝ハ猫の兎と愛あるや、又犬の兎と愛あるや、
我ハ猫をも犬をも其遊
び戯るゝ所と見ることと好
めり

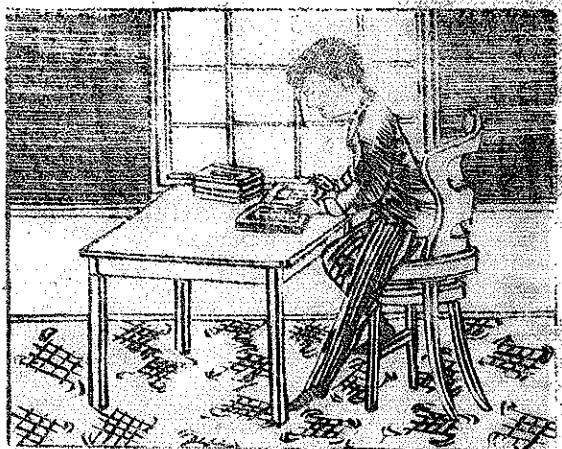
總て獸類も稚き時ハ小兎の
如く遊び戯ることと好む
ものあり中にも猫の兎ハ繩
又ハ鞠と弄びて能く戯る遊びなり○然るに



獸類も年老ゆきバ遊び戯ることを好まば人ハ
して年長けたる後まで遊び戯るゝハ耻づべき
ことよ何らばや○さきバ老たる猫を其兎の戯
き遊ぶと見ることを好めども其身に觸るゝこ
ととバ喜ばざるあり○老人も小兎の遊ぶと見
ることと好めども其身に觸るゝこととバ喜ば
ざるものゆゑ小兎ハ遊び戯るゝとも老人の身
に觸き又ハ其椅子机などハ決して手を着く
べからず

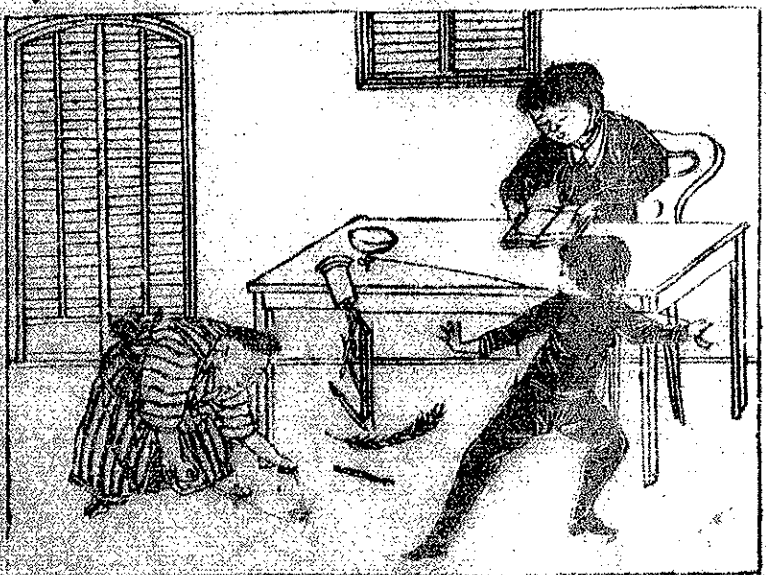
此小兎ハ學校まで善き生徒あり○汝ハ此小兎

の學校にて書と讀むを聞きたりや○此頃始めてこゝろを聞きたり



此小兒ハ何の書と讀めるや○彼ハ小學讀本と讀めり○其讀む所の小學讀本ハ何の巻ありや○彼ハ巻の三と讀めり我ハこの小兒の如く能く書と讀むものと好む能く書と讀むものハ後ハ善き人とおきばあり○若し學問もかく智慧もかくハいかで善き人とあることを得べき善き人とあることを得されば他人は愛せらるゝこともなく又貴ばるゝこともあり

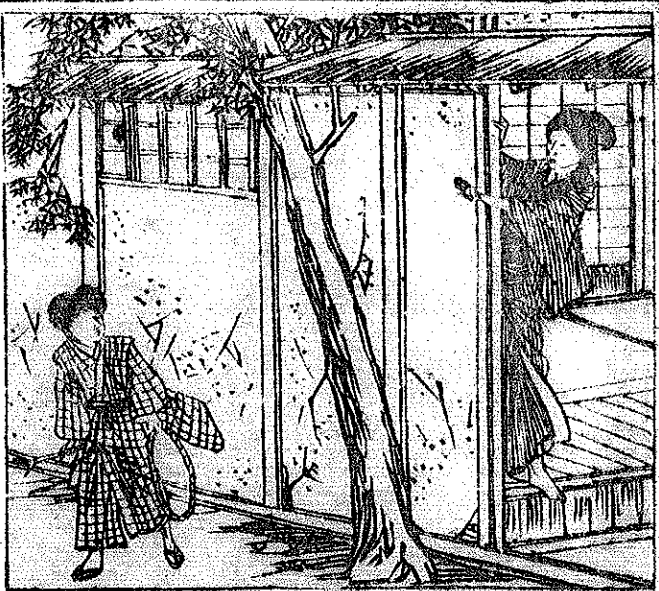
爰ハ三人の小兒あり一人ハ机に向ひて書と讀み二人ハ獨樂を廻りて遊べり獨樂を廻りて跳り旋るゆゑハ机は觸きて其上の筆筒を倒せり書と讀み居たる小兒の心ハ此二人の戯き遊ぶを何如と懸



かく思ひ居る人定めて此小兜等の他處
は行かんことを願ふあるべし

總て人の自好まざることをば人も亦好まざる
ものと思ひ遊び戯るゝにも決して人の妨とあ
るべきことをなげべからば又自好むこと人
も亦好むものと知りてこれをまづ人は譲るべ
しさきば古き教へも己の欲せざる所は人は
施すことなれといひ又己達せんと欲せば人
と達せしめよとも云へり

爰は遊歩に出でんとする小兜あり○汝は此小



兜の善きと惡しきとを知
きや○我は本其人とか
りぞ知らばと雖今遊歩
出でんとするに其母は呼
び返されて速に歸り来り
否む色なきと見えは善き
ものあるべし其母は

呼び返されてこれを厭ふ心の色は見はるるを
必善きものなりと知るべし

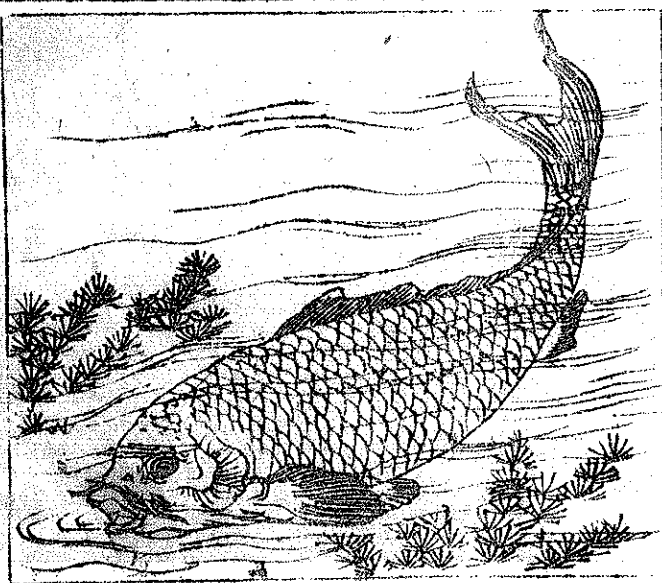
此小兜は未だ學校に入らざるか○此小兜は五六

歳ふ過きばと見ゆきば未學校へ入らざるべ
—我ハ此小兜の學校へ入りても、遊歩の事を好
まば—て勉めて書と讀み成長の後も其善き人
たるを失はざらんことを願ふなり

此圖は画けるハ何物ありや○こきハ魚あり
汝ハ生きたる魚を見たるべ—○常ハこれを見
る

汝ハ漁せ—ことあるべ—何と以て漁せ—や○
釣と糸とを以て魚を釣—ことあり

魚ハ水中は住むものゆゑハ水を離る—ときハ
其命を保つこと能なば○魚ハ、鱗と尾ありて
自由ハ水中で游泳—又全身ハ鱗あるあり、鱗が
まわり其鱗も魚よりりて、大小を異はせり、



汝ハ魚の水中はあるとき
も其目ハよく物を見ると
思ふ—○然り水中でも
よく物を見るなり○何と
以て水中でも能く物と
見ることを知きや○も
—水中まで物と見ること

能はざる時、必岩石に衝き當りて頭を傷くべし。然らざるものな、よく物を見ることを得きなり。

人の水中にて物を見ることが、分明なり。魚の水中にてても、甚分明なり。

そき魚の水中にて能く物を見るの、其目人と同し。人の水中にて能く物を見るの、其目人と同し。

魚は水中に住し、人の空氣中に住むゆゑ、人の空氣中にて能く物を見るの、魚の水中にて能く物を見るの、同し。

今この男、兎に家を辭して遠行せんとし、戸前の階を降りたるゆゑ、其妹も階を降りてこれを送り、別は臨みて、互に言を贈答する所あり。

兄曰、汝慎みて家を守り、能く其身を保つべし。火を過つことなかれ、病を生ずることなかきと。○妹は吾兄、寒暑を犯さべからば、又久しく他郷に止まるべからばと云ふ。



兄又云ふ予彼郷に到らば速に書と以て安否を
報ぜべし汝も亦其安否を報ぜよ予が他郷に在
る間、只汝の消息を得ると以て樂と云へべき
のみ

汝等此二人も何如あるものと思ふや○これを
同胞の孤あり孤とハ幼稚のとき、兩親を喪ひ
たるものなり

此二人早く兩親を喪ひたるゆゑ、今自身を立
てんとするあり、

今この男子の遠方へ行きて幾年妹と相見ること

とぞ得ばとも文字を知するゆゑ、互に書簡を
贈答して其安否を審みしむことを得べし

も、此二人文字を知らば何は因りて音信
を通じることぞ得べき

汝等此二人の事を見て能く文字を習ひ勉めて
書簡を作ることと學ぶべきなり

むろ、ある家も兄弟の小兒あり兄は七歳に
て弟は五歳あり○兄は其才最敏にして心も亦
優きものあり弟も良き性質なきとも尚幼き
ゆゑ未だ世間の事と知らず、轉りて過りたる

擧動とあることなり

ある日、兄弟とも、郊外へ出て遊べるにある
家の籬に小鳥の巢あり親鳥二人の来るを驚き
て、飛ひ去りたり兄弟の巢の
中と窺ひ見るに雛三羽あり
弟は悦びて雛を取りて持ち
歸らんと欲ふと兄はこれを
止めて親鳥の子と愛するハ
父母の我等と愛し給ふ同
ト、今汝この雛を取り去らば



親鳥の悲何如けん若我家に入り来りて我等
兄弟を捕へ去るものなり父母の悲を給ふと
幾ぢんまゝてや雛も親鳥の養ふ由りて生
長むものにして、今人の手にかゝりかば決
て育つことあるべうにばされば今この雛を取
らざることよけきと諭しけきば弟も其理を服
して兄の教を随ひたり

此弟の鳥の雛を取らんとするハ殺生あるに
非きども其理を論まれむかくの如くまゝして無
益に殺生あるとや

や得るに至るべし

されば、縦小き蟲なりとも、無益に殺むべからば、
世の理を知らざる者ハ、小き蟲を殺むを以て、些
細の事とせり、實ハ些細の事ハ似たりと雖、こを
を殺さんと思ふ心を即ち些細の事にあらば、この
心、既ハ慈悲と失ひたるあり、慈悲と失ひたる心、
漸長するに至らば、畜類を殺むの心を起し、
終ハ人々を殺むの大惡にも陥るべし、豈恐きざ
るべけんや

故ハ殺生を誡むるハ、慈善の人とあるべし、階ハ
して終ハ人類をある善人ともなり、身の幸福

明治十五年十月廿四日翻刻御届

翻刻人

林 芥介

福岡縣筑前國福岡區
福岡市百三番地

小學讀本卷二終